

# 魯文の売文業

高 木 元

要 旨 仮名垣魯文に関する研究は『安愚楽鍋』や『西洋道中膝栗毛』など著名なテキストを除いて著しく遅れていた。この数年間、国文研で組織された魯文研究会に参加した方々の努力に拠って、魯文の著編述活動の全貌が明らかにされつつある。ところが、他作の雑著に提供した序跋や錦絵の填詞、端唄本、引き札などについてはインデックスが整備されていないこともあり、その全体像は必ずしも見えていない。本稿では管見に入った資料に拠り、作家としての出発をした鈍亭時代から晩年に至るまでの魯文の文筆活動、すなわち売文業の諸相を垣間見ることにしたい。

魯文の人生の軌跡やその業績を辿る時、所謂〈雑書〉の序跋類にも多くの筆の跡を見出すことに気付く。近代的な職業作家像からは遠く隔たっているかもしれないが、近世期の戯作者像から考えれば、岡山鳥や高井蘭山等を引き合ひに出す迄もなく、何の違和感も感じられない。小説家というよりは〈物書き〉として実に広範な活動をしていたからである。戯作者の原稿料は、所謂印税方式を採っていなかったために、甚だ安かったものと想像されるが、若き日の魯文も口に糊すために依頼された原稿は何でも引受けたに相違ないし、また与えられた仕事で能力を発揮して見せなければ、次の仕事が貰えなかったはずである。しかし、そのことが直ちに消極的な意味しか持ち合わせなかったわけではない。

魯文の場合には、安政期（万延元年以前）の鈍亭時代には〈切附本〉と呼ばれる粗製濫造された廉価な抄出本に本領を發揮する<sup>(1)</sup>。また、この時期には慕々山人と称して艶本を多く執筆していたことも知られている。この両者に共通しているのは〈抄録〉という方法である。魯文自身は「糟粕」と表現することが多いが、長編テキストをダイジェストするには相応の学識と才能が必要であった。

例えば近世小説の雄『南総里見八犬伝』を抄出した袋入本『英名八犬士』全八編（安政二〜四）は、文字通り原文の切り貼りで作られているのであるが、その文章の繋ぎ方を丁寧<sup>(2)</sup>に観察するに、非常に良く工夫されていることが分る。この仕事の一方で、艶本『佐勢身八開傳』（安政三年刊、中本三冊）を執筆している。艶本は著名なテキストを換骨奪胎したものが多く、この『八犬伝』のパロディも、実に魯文の戯作センスが横溢して良くできたテキスト

だと思ふ。さらにこの時期に、合巻『當世八犬傳』（安政三年夏、芳宗画、糸屋庄兵衛板）をも手掛けており、名場面を繋ぐ形式に拠ってわずか十丁で終わらせ、世界一短い『八犬伝』となっている。後に『八犬伝』を草双紙化して長い間刊行が続いた『仮名読八犬伝』の二八―三一編（慶応元〳明治元年、芳幾画、広岡屋幸助板）を担当する。という具合に、一度仕込んだネタを手を変え品を替えて利用して多くの執筆を続けていたのである。

さて、これらの抄録本類は魯文の文業の一端として扱うことが可能であり、それなりの評価も可能だと思われる。しかし、問題は自作以外の雑書に供せられた序跋類である。例えば〈画譜〉〈絵手本〉の類に魯文の序文を見出すことができる。また、〈花柳本〉や〈割烹案内〉など明治期の活字本にも序を書いている。中でも多いのが音曲関係の本で、〈都々逸本〉〈端唄本〉には数多くの筆の跡が見られる。〈錦絵の填詞〉や〈報條〉〈引き札〉、さらには調査が及んでいないが〈新聞記事〉や〈俳諧〉〈狂歌〉などに至るまで、多くの雑書に遺されている筆の跡を辿ることも、魯文研究にとって（社会的研究としても）不可欠の作業であると言い得よう。

しかし、斯様な落穂拾いは決して楽な作業ではない。多くの場合、著編者や画工板元名以外の人名が書誌データとしてデータベース化されておらず、愚直に片端からそれらしい本を繙いて見る以外に、発見するための術がないからである。幸い国文研には全国の文庫や図書館から収集されたマイクロ資料が集積されており、これらの調査に多大な便宜を供与してくれた。ただし、今後はマイクロ化されていないコレクションなどの調査が不可欠になる。

以下、本稿では基礎資料とすべき叩台として、管見に入った冊子体資料の略書誌（所在情報）と序文を列挙してみることにする。というのも、此種の本の中味に関しては題名から知れることが多く、序跋類は様式の枠の中で書かれた戯文として、魯文の著作の一端と見做して差し支えないからである。なお、今回は序跋類に着目したため、一枚刷の錦絵や双六、報條や引札などは扱わないことにする。<sup>3)</sup>

甚だ不完全なものであることは承知しているが、未載の資料や、多々存するであろう不行き届きについて、大方の御教示を伏して庶幾うものである。

注

- 1 拙稿「鈍亨時代の魯文―切附本をめぐって―」〔社会文化科学研究〕第十一号、千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇五年九月
- 2 拙稿「『英名八犬士―解題と翻刻―』(一・二)〔人文研究〕第三四・三六号、千葉大学文学部、二〇〇五・二〇〇七年三月)以下、三・四と継続予定。
- 3 国文学研究資料館二〇〇六年度秋季特別展『仮名垣魯文百覧会展示目録』に、いくらかの資料が谷川恵一、青田寿美、高橋則子、山本和明氏らに拠って紹介されている。

## 二 画譜・絵手本

安政期に鈍亨号で二点、文久期に仮名垣号で一点の〈絵手本〉に序文を寄せているのが見出された。その後、慶応以降に〈漫画〉〈画譜〉〈図会〉に序文を寄せているが、これらの画譜は基本的に整版本であり、序文も整版である。

ここでは『萬國人物志』二編(中本一冊、魯文譯、芳虎画、西三改〔文久元年〕、山田屋庄次郎板。パリ裝飾芸術美術館図書室[Bibliothèque Musée des Arts Decoratifs / PARIS]以下MAD(A024))のような、魯文自身の編著作に記された序文(自序)は含まないことにする。

浮世繪手本(中本一冊、卯七・改〔安政二・七〕、一壽齋芳員、蓬左文庫蔵尾崎コレクション〔尾24-50/S988〕)

巨瀬性が馬ハ萩を喰。雪舟が鼠ハ縛繩を喰切。馬杏をもつて蟹となす杯人口に會灸すれども。其事情きはめて定かならず。また菱川が姿繪に春情を動かし。應舉が幽霊に魂を消なんどハ。ちと野暮過て箱根から。先の頃。歌舞妓仕入の吃又が大津繪ハ。名に響たる大入にて。戯場のまうけ欸。書房が徳欸。國芳さんが名画の離魂。其教子の芳員ぬしハ。當時日の出の名筆画才。天地万物有非の情一トたび筆を走らすれば。萬画忽ち體をなし。しかも初心に習ひ易く。筆数いらずに利をせめて。細画と看する浮世繪手本。當世風の筆づかひ。見ざらめやハ習はざらめやハ。是に序をせし僕もそろく学んと思ふにぞ

## 安政二卯歳

戀岱野夫

鈍亭魯文戯誌

繪本早學 初編(中本一冊、一光齋芳盛、二十丁、上田花月(無名)の、国文研)

## 早 學初編叙

末の井興が画る龍。吟る如くにして。沛然と雲起り四明の僧が画る虎。嘯に似て蕭然と風を生ず。吾朝の古廟の繪馬。闇夜鬼を乗て奔走。畧画の猫。よく家鹿を防禦。俱に丹誠。神に入るの妙なり。遮莫起伏升降の画法。得て習ひ安く学難かり。余が友人一光齋芳盛ぬし。丹青に毫を染るをもて。活業とするに光陰あり。平常に机下に属する。教弟一等を導くに。そが最初筆を珉江の浅きに衝せ。終に入楚の硯海に深からしめんと欲する随意。其道の枝折ともなれかしとて。寸馬豆人のいとまめやかに。山川草木の草画及び。禽獸蟲魚網羅に洩さず。画き集めし一卷を。頓に繪本早學とハ題号らる。曾て子が意匠を勞せるや井講四明の僧に及ぶ事遠しと雖初心の為に要とすなれば。得て習ひ安く学ふに近しと。そが理解を簡端に序して。填詞をかいしするすも。所謂蛇を画て。足を添るすさみそやあらんかし

時維安政四丁巳葉月初旬 毫採于戀岱小説書屋

稗史著作郎

鈍亭魯文題「鈍亭」(呂文子)

諸職画通 初編(中本一冊、一立齋廣重画、松林堂 MAD <A282>)

壺の中に天地を収むる。仙人の術はいざ不知。寸楮に萬物の象をなし。情景を目前に窺する事。画の道に勝れるハあらざるべし。茲に立齋廣重先生。亡父の意を繼木の梅。未青軸の莊年ながら。其業前の翁に耻す家の風をも吹傳え。芳き名を四方にかをらし。出藍の誉 殆高かり。されバ長者二代なしと。世の諺に云めれど。楠氏の正行大屋力弥の義勇を生ぜし如く。蛙の子の「蛙となり。瓜の蔓に南瓜の生ずと。羅鑑定し本感功目。自身の詭より時珍の評判。能を拏たる漫画の一幅。これを開けハ奇に驚き。これを学べバ巧に感ず。嗚呼此父にして此子あり。人形画兒ハ天窓かく。寺子仲間の延くりと一ッに混することなかれ。又板下と刻成とハ画面が變るなんど。身代りの偽ふでならぬ筆法傳授の繪習鑑其證人ハ寺朋友の

文久三亥春

假名垣魯文書之「印」

一魁漫画 初編(中本一冊、一魁齋芳年筆、篤尚堂板、MAD <A023>)

一魁漫画初編序

吳道子普く諸經にわたりて地獄变相の圖を画き探幽轉諸物を求て百鬼夜行の象を工めりされば画材と号る物総て非情有有情につかひ形なきを形とし具せざるを具るを働きと稱滑稽といふ彼雷槌に翅が生蛇の目傘に足を生ずる類をさして狂画と愛るは僧正以来の好事になん茲に余が友一魁主人玄々妙手の玄治店が末門に業は興せど其業社中の未に下らず青年にして老工を耻す一度筆を揮とさんば百圖百象紙上に浮び一編の漫画手中に溢る美にや諸木に魁の名詮自性芳しき名を年毎に薫らする梅の荅の筆頭に開きて春を知りなんかし

假名垣魯文誌

※刊記「慶應三丙寅年五月發行／書林／大坂／伊丹屋善兵衛・河内屋喜兵衛・河内屋茂兵衛」、後印本。

都名所画譜 初編（中本一冊 朝香樓芳春筆 国文研・立命館大ARC）

都名所画譜初編の叙

〔行事改印〕

萬物形象あり形象といへば則画なり其画の徳たる一字不通の徒も是を披閱て其物なるを知るに至る故に年歳画の道行れて梓刻の画帙多かる中に此一冊史ハ余が友人一楊齋主人遠境に杖を走見わたせば柳櫻を混ませてと和歌に詠りし都の勝地を矢立の筆に記しおけるを書肆いつの暇にか探知りけん紙魚の住家を訪て懇に板下を乞ひ求め梓の花を咲せつゝ美屋古名所画譜と題するは彼下の句と画名に因む春の錦の意にや有けむかし

慶應丙寅\孟春

應需 假名垣魯文誌

潜龍堂画譜 魚之部（半紙本一冊、画工・瀧澤清、萩原政之助刻、MAD〈A136〉）

潜龍堂画譜小言

龐元英が談叢に依て虎を画くに林木を以てせざるを知る。夫虎は麴鼠を怖れ避るを常とす。麴鼠は多く深林の枝上に隠栖し林中虎の過るを見れば必ず嗚噪して自ら己が毛を抜て虎の身に投するに其着處蟲を生じ偏身瘡を生し腐爛して終に死に至る。故に林木の中虎至らず。画学の逸史虎を画くに平原曠野茅葦叢薄の中を交ゆるも曾て林木を作ざるは誠に謂あり。五雜俎に虎林中に在る微證を挙、噫鳥獸に花木を添るも其好憎の意を知らずして画く者筆勢の活潑たるも麴鼠に逢へる虎に似て死画といふとも不可ならず潜龍堂の画方能その古実に涉り画法全く得るものとす。丹青亦た以て惟ふ可し。則ち此小言を記して序に換ゆ。

明治十二年極月念三日武総橋辺旧虎\新舖の書屋に記す

假名垣魯文漫題「猫印」

※刊記「明治十三年一月出版／求古堂・松壽半造」

晝齋鈍画 初編 中横本一冊（国文研〈ヤ8-254〉）

晝齋鈍画初編序詞

善怪きを記する者を鬼の董狐と称して古語あり惺々先生人呼んで画鬼と稱す余猶此に餘贄して画中の董狐と称するも亦不可ならずとせん先生元來狩野家の門に在壯年画風自然その範圍を放れ一家の運筆縱橫自在暗に鬼を哭かしめ神を驚かすの奇形を画す曾て聞く陳平傀儡を作りて漢高白頭の囲を解き魯班木鳶を削て天を飛んで三日に至ると是皆その伎の神に通ずるの故なり或ハ云張僧繇壁上に龍を画き晴を點ずるとき則ち雷電し而して飛騰し兆典司不動を画くに背後の火焰紙上を焦すと同一の妙先生の「手裡にあり余先生を知る二十餘年藍より出て藍より青きハ世以て知る所硯池波上に魚躍り活潑の筆勢豈鈍画の題號然りとするに堪んや今茲内國第二回勸業博覽會場出品の一面その定價百圓金然るも衆目視指し夙に購求を競ひしを以て先生の聲價枯木上の鴉と等に殆ど高きを証するなり故に此事を結言とす

于時明治龍集十四年第六月新橋竹川街京文社樓にいろは新聞校閱の間紅塵深き處に題す

尋知 假名垣魯文記◇

木曾街道圖繪 後篇（中本横本二冊、北齋門人蹄齋北馬筆、MAD〈A008〉）

序

蹄齋北馬老人の筆頭の達者なるは。神行戴宗の鉄脚も遅とし。老て倍益盛なるは。東方朔の気力をも少しとすべし。



漫画の萬里に毫を飛ばし。百富士の高根に墨水を降らして登龍の体裁あり。此小冊は老人木曾路に筆を走て。六十九次を目前に画れたる遺墨中の名勝にして。眺望の奇観。敢て比すべきものなく。前に初編刻成て。次で二編の發兌近し。是に序せよと需に応じ。木曾の棧道ふみも見ぬ。筆のかさ杖とりあへず。漫書なる旅の記も。翁が達爛に似もやらで。僅に半丁をすぎずして。疾草臥て筆を休めつ

### 巳の春

戯作者の抜参り／假名垣小僧／魯文しるす「文」

※刊記「明治廿七年五月廿六日翻刻印刷／同年五月廿九日發行、博文館」。初編の序は「松古山人記」。これも「尚古」に音通するので魯文力。

### 三 端唄・都々逸

魯文が歌澤に入門し端唄や都々逸の作者や撰者としても活動をしていたことは知られているが、具体的な魯文の活動の様相を明らかにすることは容易ではない。序文を記したものである、単に序を寄せただけのものなのか、撰者としての撰集なのか、自作集なのかの区別が明確に出来ないからである。また、「鈍亭魯文」や「假名垣魯文」は当然として、「仁田澤鈍通」「杉の本鈍通」「鈍通子」(元祖)や「骨董屋」「雅楽」「野狐庵」「妻恋やもめ」などという別号も使用しているようだ。ただ、他の作でも見掛ける「竹葉」「瓢亭念魚」などが、魯文自身かどうかは断定できるだけの資料が見当たらない。この手の端唄本は無数に残存しており精確な書目も備わっていないため、魯文の足跡を辿るには甚だ心もとないが、取り敢えず管見に入ったものを集めてみた。

いろはがな冠どどいつ（中本一冊、国学院高藤田小林・上田図花月・都中央〈5643-68〉）

倭漢を吟で。猛鬼神の心を和らげし。雲上人ハ。侍人に會て詩を献し酒客に。釵菱の酒札をあたへし。不意の幸福なり。雅俗今昔の人情を察すに雅人俗人をあなどりて。文盲と呼ハ俗人雅人を朝て。偏屈と称ふ大鵬燕雀を笑へども。蚊蚊の眼毛に巢を喰ふ蟻螟に。へこまされたるためしもあり。過たるハ猶不及と。吾輩の田夫へひく無益論。餅はもちやと發客の。主人が目ざす墮落者四十八字のど、一を。足下述意ハなるかいなと鼻唄交りの注もんちやく。おつときたさと請合拍子例のずるけの催促も。まゝよくて半月斗に横たにかぶりを振なから。意趣とか何とか題号で。金針の折倉卒にやうやく稿成た。假名の浄書蚯蚓ののたくり涎童。頭上とゝもに。かくのこし

嘉永甲 寅仲妖葉月

戀岱麓 野狐庵主人記◇

虚八百の粹個等浄談泊の遊戯堂に會合して度々一の新案を著作なすところ 鯨・晋吞・徳・狐（魯文）・直（芳直）  
つもりにしかず、かきつめて、言の葉の、にしきの衣、つゞりあけけり 半可通人

○初桜天狗の書たふみ見せん 晋子

今昔人情不同 古 調賀曲又新 度々逸居士

めでたく、が、三ツかさなりて、庭に鶴龜、五葉の松

野狐庵主人著述

※「野狐庵編」「一盛齋芳直画」。巻末に十六丁の「辻うら」（板心）を付す。都中央本は外題「辻宇良都々逸」見返「馬四吉文板」、落丁存。

新板夕暮かへうた（中本一冊、十一丁、直政画。都中央〈5643-5〉〈5643-57〉）

端唄つれく草全

夕暮序

徒然なる儘に日ぐらしの硯に向ひ。心に移りゆく架空寓言を。著作るといひたらんにハ。どふやら高上らしく聞ゆれど。質の利上の覚記や。借金の断手簡に、青息ついたるそか折から、例の書房入来り夕ぐれの替歌に序せよと乞ふ。取あへず披閱る百花堂主人が撰に成れり双丘の兼好法師が往古のわざくれハ。也哉法師が今様の洒落にしかず仇な殺し文句の一曲にハ。色好まざらん玉の盃の底抜上戸も。杯盤狼藉の不礼講を恥。芋喰僧止のむくつけきも。栗喰娘のおてんばなるも是を学で通ならしめ。甚九を踊る鼎かぶりも二上り本調子の意氣なるを飲び。爪弾に情を運ばすなど。みな此ぬしの意中に巧てこれや仏家の方便妄語。衆上濟度の大通知識。実に有がたいとまうしやす余ハ元来の野暮鴛片言ながら文友がひにホウ補戯興と序する而已。

安政二〇卯初夏

妻戀の寡をのこ鈍亭のあるじ魯文しるす

※見返に「元うた」を載せる。ノド「つれく」。「妻恋やもめ」(十一ウ)。

たくれ式編(中本一冊、十二丁、直政画。都中央(5643-5)、蓬左尾崎(19-107/B380))

春と秋といづれ欵情の深からん。勝り劣りなしと三云。貫之ハ秋の方哀情深くて趣き多しといへり。且秋ハ律の調にて。糸竹の調子も殊更によしといふ。されバ旦と夕の情愛これにひとし。五条わたりの黄昏に。白き扇に夕顔の花もてあしらひしも。夕暮比の洗髪。仇な娘も爺さんも。夕暮響て下涼。鈴の音につれチャンく。ゆふくれ急ぐ見世出前。またみせたらぬ小册迄口が掛て開がしい。好男美嬢の御催促。納涼がてらの夕暮に。御立寄を取あへず。ヘイ新板の替唄でムり弁

筆頭道人述(念魚)

業平観 行平鍋

へ夕ぐれになまけ仕事しごとのすみきらず月に不自由じゆうのまず著述ちよじゆつ仕かけた作さくができぬぞへマタできぬかへするものこれでもお間まにはあわせ舛 野狐庵

鈍亨魯文披閱

※都中央は初二編合綴。見返「遊宇九麗貳篇」。板心「夕ぐれ二」。作者として「野狐庵」のほか「竹葉・念魚・筆顛・粟瓜・魯国屋」などに見え、八代目・しうか・家橋の追善を載せる。

東天狗木之葉都々一 (中本二冊、十丁。蓬左尾崎 〔調19・127 / B500〕)

人の目をくらまさんにもあらバこそ元より山の天狗てんぐでもなしとハ故人風來山人こじんふうらいさんじんの狂詠きやうえいなり近頃十把ちかごろじっば一トからげの木この葉連中三杉四杉はれんぢうみさしよさきの杉林すぎばやしに黨とうを會くわいし群むれをつとひておのがまにく諸藝しよげいをつらね一番落いちばんをちをとらんとする者大都會ものたいとくわいに幾いくばくぞやしかハあれども鼻高はなたかきが故ゆゑに貴たつとからずうなるを以貴もつてたつとしとすの先言せんげんあれバ余よもその群むれに交まじわりて終ついに三熱さんねつの魔界まかいに墮だし扇歌せんか和尚じやうが跡あとをしたひ直たに此道このみちの僧正坊そうじやうぼうとならんと欲ほつす而已

安政二乙卯初春

妻戀鈍亨の食客

石川亭板等「印」

「常磐津・富本・清元・長唄・都々一」入「東天狗連」正月二日夜より「千客万来」

見臺けんたいにつかへる鼻はなの高たかみくら熱湯ねつたうのんでうなる諸天狗

妻こひのやもめ

※外題「新板」  
「流行はうた」東天狗木之葉都々一「連中作名人」初編、見返「東天狗この葉と、いつ」  
「富世」、末丁「石川亭板等校「米」」。

きやりくずし かまくら 初編（中本一冊、直政戯画、鈍亭魯文閩弁）

かうたうたへ 唐人をきどり。和歌を詠れバ、お公家の声色をつかひ。端唄を編バ、作者だと思ふ。悉皆天狗の愚を売て、利をせんと思へバなり。此頃板元鎌倉の新文句を乞へる俵にこいつハ、大方売るだろ、う利を見てせざるハ、勇なしと傍から音頭を鳥がなく。東ッ子の好きやりの一曲しめろや、いと寿て序す

安政二卯水無月

○往事歌沢老婆が門に入れて、何天狗とハよは、れし墮落漢

鈍亭魯文述 [印]

きやりくずし かまくら 式編（中本一冊、直政戯画、鈍亭魯文閩弁）

薪とる鎌倉くづしの唱哥鳥が啼、東の地にてきほひ勇める俠客等がもてはやす事とはなりぬさるからに春霞三筋ひくなる唄女が酒の席ことほぎの会にもこれをしも魁にするは鎌くらてふ名にふさはしくてこや、此道の、大天窓ならんかも、彼地の海より出るてふ、松の魚のひとふしも愛さらめやは味はざらめやは

辰の春

鈍通子しるす [印]

※辰は安政三年。『音曲大黒煎餅（絵入りはやり唄本廿種）』（俗語叢書第七冊、太平書屋）所収。「いなせぶし さくらのかえ唄」も同書に載る。青田氏の御示教に拠る。

いなせぶし さくらのかえ唄

吸かはす酒にさくらも酔やせん、かたにかゝつてもとる、一と枝、葉唄、絲竹」（見返）

行流さくらのかえ唄 いなせぶし

大天狗連 宗匠坊 ゑらみ

本うた

へさくらエゝゝきりしまさぐんかなんぼのさつきか今みやかはぎざやうさんなきくたいけんじあやめエゝかきつは

たアにおみなアへし

へたほさけくれんげはなさつせろにほひがすきなならハツハはくほたんひいじんそうかヨ

端唄録家仙

晋の七賢ハ竹林に群をつどひておのが随意に遊戯をつくし端唄の六仙ハ一節の語呂にもとづき替唄の趣向にたわけをつくす一弦一虚を吼て万看実を唄ふ嗚呼

たい屈の口へ飛込蚊蚊かな野慕庵

鈍通子・かな和尚・梅喜里禮・鈴亭谷峩・放心喜廓・瓢亭念魚

へさくハエゝゝ種員種清西馬に魯文か万亭かあの金水春水錦鷺英寿谷峩に山東庵

へたんとかけく合巻よみ切目先をかへ唄サツサはやく新はんうりだすこつたよ

栗毛舎 蹄里作

※『音曲大煎餅（絵入りはやり唄本廿冊）』（俗謡叢書第七冊、太平書屋）所収

新板さくらエ引かへうた いなせぶし 一編（狩野文庫）

都々一宗匠坊高座をくだりて以来愛宕鞍馬の群ならぬすつてんつく天狗連鶴の真似をするからす連中水にハおと

る白湯を呑で嘴をとがらせつゝ唄ふハさくららの伊奈世ぶしその上汁をすくひ取して例の小冊に仕立たるハ梓主の小刀細工人の揮で角力とる設利につよき利喜市の疾わざその残編の口序にやとわれ土方の子には劣りたる余か微才の筆のさき口さきにてわらかすくとしかなり

弥生のころ

骨董屋鈍通子のふる

「今のエ、くはやりの合巻繪草紙ハすなごの白ひやうしアレ浮世繪ハみな豊國でにがは國貞のいへのかぶ

「国よし、く工風の名人りやく画ハ慶重サ、サ東にしきは御江戸の事だよ」

骨董屋鈍通子選、歌川登理女戯書

※音曲大黒煎餅（絵入りはやり唄本甘種）（俗謡叢書第七冊、太平書屋）にも所収

いなせぶし新文句桜の替つた三編（谷村文庫（429-1-1））

凡例

一 近頃端唄大に流行して其道の犬天狗新文句をあらそひ専ら替歌を需故に筆硯に親む風雅雄等唱歌どり俳諧どりなどおのが随意妙案を綴りなせりしが中にその節曲をしらは只替歌を礎として文句に補綴ともがら多きが故に三弦にかくる時呂律の違ひはくなれバ唄ふ者の咽にからまり語呂の「つた」はらざるもまゝ有是手爾葉を知らずして和哥を」詠じ表則をもわきまへず詩を作るの類ひにして端唄利た風のそしりまぬかれ難く當時端唄の章本と唱るもの大半ハみな然り唄本好の花玉達玉石を混ることなかれ

一 譬バ此唄の節曲語呂合へさくらエ、く桐しまさゞんかなんばのさつきか今みやかはきぎやうさんなまきくたいけんじあやめかきつはたにおみなへし、くすきなならハ□□はくばたん□□びじんそうか□□○すべてのおつ合みなその元唄の曲調を正して而作らずんばかたいかな三弦に合せんこと

丙辰夏

※丙辰は安政三年四月

音曲長者  
端唄問丸

杉の本鈍通◇

艶競端唄合奏

初編（中本二冊、二十丁。蓬左尾崎〈詞19.84/B〉）

文運の昌んなるや。九夏の夕辺の蚊の音よりも驚しく。さるからに浄瑠璃端唄も。作者各輩響に倣ふて漢の倭の引書にいと雅言体もいできて。古代とハいたく異なり。斯物替り星移り。そが節譜さへ言魂を訂し。曲調を改むものから。記録の小冊も心氣を勞し。新規をつくして目前の段取。合巻仕立てで見せつけしも。画組で威す書房が脚色。文章句々の拙なきハ。子子あがりの例の濁音。その文運の聲曲も。高く聞ゆることあらバ。野夫蚊も功の者とやいはまし

丙辰九夏三伏

※丙辰は安政三年四月

音曲長者  
小唄問丸

杉廼本鈍通◇

〔口絵〕

端唄指南／歌澤於流

天狗連會首／骨董屋雅楽

夕されバ門辺涼しく風たちて人の袖にもよするさ、波／鈍亭贊〔呂文〕

〔口絵〕

薪樵りしと詠じけん鎌倉も、昔の様とうつて変りし大都會、金の成る木の植ゑ所。何から何まで抜目なく行届きたる十が眼、あるが中にも音曲の余興ながらの小唄さへ、今ハ端唄と一変して、三筋の弦の世渡に、身過ハよみと

歌沢が流を汲し師範の門札、涼しき夏の雪の下に、いと風雅なる家造して、女主人のうら若き、歳も二八のぼつとり者。彼の笹丸さ、が教子の、節さへ名さへ於流とて、さつはりとした愛嬌者。「ヲヤ雅楽さん、谷まさん、鈍通さん。

御揃で仮宅へでも御出のつもりかへ」と莞爾笑めバ、出過の鈍通「へ、お師匠さんが久しいもんだぜ。今日等の様な



暑い日に仮宅へ出掛たら、これが本の日向の西瓜だらう」「マァ何でも良から、皆さん裸になつてお涼なはいナ。今お母が帰りますと葛水でも拵へさせますからサ。そして鈍通さんが今度お拵の総まくりの端唄を、今日絵草紙屋で取つて参つたから、雅楽さん谷まさんニツ三ツおさらいなさいましな」「ヲ、そうよ、おらァ魚辰に頼て明日の晩ハ中橋連の助に行つてもりだから、ナント一番新文句で見つけて呉やう」「ヲ、そいつハ奇妙だ。そして今から晩までに大概覚へられやうかのう御師匠さん」「そりやア御前はん方ハ端唄を御作んな程でありますから、造作ハ御座居ますまい」「イヤ、さうでねへ。こと鈍通子なぞハ毎日端唄を作るのが商売でさへ、三味線に掛つちやア一句も出ねへで、ぎく／＼つかへてばつかし居るじやアねへか」「ヲヤ、大部俺を痛め付けるが、俺だつて『すちやらか』や『さくら』位ハ出来ねへでなるものか」「ヲヤ鈍通さんが少し熱くなつた様でありますねホ、」「アハ、ハ、ハ、ハ、」

○聲曲端唄弦々猫 鈍通」2ウ3ウ

脚色歌澤 艶競端唄合奏 鈍亨魯文述  
立川國郷 一惠齋芳幾 画

二編三編追々出版

隆達が破れハ菅笠しめ緒のかづら長く傳はりそれから見ればあふ見のやと彼の一蝶が小唄の節にひき續いての端唄の流行作者机上の徒然に三筋の絲に調べあげたる正律の唱歌本なり

聲曲堂 三筋町猫新道 大吉屋利市 「其」「サ」 録目奥

流「ヲヤ、皆さん未だ総まくりにさらひもしないうちお帰るかエ。まァい、じやアありませんか」雅「それでもあんなまり夜が更たから、また明日の晩来てさらひませう」谷ま先生ハ、モウ先へ帰て今時分ハ白川夜船たらう。サア

鈍通子お発としよう」鈍「左様、総まくりの全部ハ二編三編と続て明日明後日と二晩で読切じやアねへ、さらいきりとしやせう」流「そんなら余りおそうくでござりました。雅楽さん家元へ御出なすつたら官敷く」雅「アイそう申しやせう。そんなら」と表へ立出ると、ハッの拍子木「カチくく」先此編ハこれぎり続て二編の御評判官敷く。めでたしくく。

鈍通子「國郷画」

20オウ

北郷文唱  
元地錦繡  
東都逸語紋集  
鈍亭魯文校

初編近刻

一惠斎芳幾画

元禄の五元集ハ半面美人の誉れ高く今様の語紋集ハ板面美冊の制巧を尽せりそが言の葉の人情性躰苦界のあなをよく穿て僅の小唄に腸をゑぐるの奇冊なり

聲曲堂

三筋町猫新道

大吉屋利市

「共」「サ」

奥目録

※外題「聲曲堂梓、鈍亭魯文撰、立川國郷画」、見返「あだ競端唄のつれがし、初編上(下)、板心「まくり」。安政三年序、巻頭巻末を草双紙風に仕立てた端唄本。近刻広告まで載るが板元名は架空のものか。

葉歌夢浮世(中本一冊、十一丁。蓬左尾崎(文19-83/B457))

栄枯盛衰は古今にかわらすきのふハ島の御座船に緋扇かさす官女たちも今日は壇の浦に船まんちうをひさき仲の町はりのおいらんも山の神と変するあれは岡場所の賣妓も御新造さんとなる事あり柳巷花街もかゝり火に焼野となりし飛鳥川きのふの渚はけふの瀬とかわつた世界の仮宅細見その数々の玉を拾ふて石川亭の呑公かつきたまさこの葉唄すてしまた此道のお初會なれば余ハひきつけをたのまれてへいあなたへといふことしかり

安政三辰書

つま恋の 骨董菴主人戯誌◇

※見返「はうたの／＼作者名入」、板心「はうた」、「集者 石川亭友等校「茶」。

端唄稽古三味線 (中本一冊、二十丁。蓬左尾崎〈調19-101/B474〉)

端唄稽古三味撰序

前に一筆庵英泉水が稽古三味撰と号る物一挺ありそハ古近江が器と等く世に聞えたる名作にしてそか音色の妙なるや紫檀樟に花欄洞の花を咲せ三筋の綴絲三巻に能三流の調子を合奏滑稽の章句且人情の穴を穿ち聴者をして頤を解しむ事實に紋々猫とや称へんそを手」ほどのきの師匠として今弾習ふ替三味撰ハ八乳の皮にハ似もつかぬ余が面の厚皮もて僅の紙ごま二十員稍張揚し例の不細工未手尔遠葉の絲道もあかぬ端唄の稽古三味線意の駒に無智をあて心の猿緒を打励し細き三絲の鳩胸より絞り出したる愚案のちぶくら音の悪い安棹も根緒胸係の飾をつけて海老」尾美しく製巧なバ轉珍ちんと轟震るりて書房の糸ぐら賑ハすことのありもやせんかと自惚に一寸と一撥當ることしかり

戀岱の茅舎に端唄稽古のいとま

江戸

鈍亭魯文戯誌◇

維時安政丙辰の文月竹やくの賣聲に颯々と編急て草稿成おなじく冬初旬刻成發市す」

端唄稽古三味撰

江戸

杉廼本鈍通戯述

抑 爰にと話説す。時代ハずつと往古。物替り星月夜。かまくら山の賑ひハ諸國の人の箒溜としてはうき千里の遠をいとはず民の止る大都會。實に昌平の御恩澤ハ。津々裏店のすみから隅まで行届きたる御改政仁義八百威儀三千。代地

と新地門前地を増て六千余町の中に。黄門通の東横町鯛まる新道と云る街に。近頃流行歌澤の流に生る燕子花。それがゆかり」の花宮浦。似たりや似たり仁田沢と。表札打たる格子戸ハ細き三筋の糸渡り。こも渡世の端唄の稽古所。晝夜出這入好者の連中。てうしはづれの上戸も有バ。カンをはつさぬ下戸もあり。節の佳いハイの若衆にもあらず。聲の錆たハ鍍物屋の番頭と極らず。親不孝の塩辛聲ハ。糠みそに響てかうくの味を替らせ。お陀佛の胴満こへハ隣の堅法華が自我経をさまたぐ。あるハ耳を閉く破鐘の梵音。耳をそばだつ頻伽の清音。善も悪も混雜て替るくのけいこの形容ハくち繪に譲りて本文の。章々句句々を知らまく欲せバ。且下回に解分を聴ねかし。」

○ 東都 音曲長者 杉廼本鈍通戯述「印」  
小唄問丸

○ 全 滑稽狂画 一流元祖 光盛舎佐久丸画「印」

※外題「はうた稽古三味線」、見返「けいこ三味線の絵」、口絵第一図に「端唄 仁田沢\作丸・鈍」とあり「名もしらぬ木に風情あり帰り花\野狐丸」、口絵第二図は「遊戯の衆人仁田沢の端唄を哮む圖」とあり「研平・玉庄・魚安・車栄・かざつな」が描かれる。画工の「佐久丸」は「光盛舎」とあることから一光齋芳盛かもしれない。

調子附 端唄獨稽古(中本一冊、十八丁。国文研44-1-25)・パリ東洋語図書館蔵 JAPAF.125(3))  
替唄入

端唄獨稽古序



神樂催馬樂は。あがりたる。代のわざくれにて。榮花物語の川ぞひ柳風吹バ。徒然草のふれく小雪。土佐日記の船子の唄。これらハ今の童謡に等しく。新に節譜を定めたる。唄ひものにハあらざるべし。中興三弦来舶て以来。

俗ぞく小唄こうたと一變へんして。隆達りうたつ弄齋りやうさい八兵衛はちべゑ吉兵衛きちべゑおのゝ一派はの節ふしを設もうけ此道このちいよゝ盛まかんとなれり彼のか一蝶あさつハ朝妻あさつま船ふねに。  
 あだし艶あだなる浮名うきを流ながし。晦日みどの月つきの小紫むらさハ。箆かじの鳥とりかやうらめしと。小唄こうたに苦界くかいのはかなきをかこてり。其松まの  
 葉はの「落おちこぼれてこゝに緑みどりの色いろを顕あはし此頃このころ端唄はうたの流行りうこうたるや歳々せいせいに倍ばいし月々げつげつに弥増いよましあらゆる通家つうか意匠いせうを勞らうじ手をかえ  
 品かへうたを替唄かへうたの新しん梓しやう發はつ兌だ先はつを競まふこも昌平しやうへいの餘澤よたにして萬民ばん鞆腹こかくの餘興よきやうなるべしされば歡喜くはんの雀すずめ踊おどりは當振あての手ておどりに  
 よも似にたらましと机き上のつれゝ僕わがも亦濁またどたるこハ音ねほのめかして獨稽ひとりけい古こにはじかくになん

安やすらけき／まつりこと／三ツのとし／はしめの夏なつ

滑稽道場／鈍亭のあるじ／魯文しるす ◆ 音丸 問

※見返「ひとりけいこ／光齋」、「異本洞房語園に／載る所朗細の唄」(一オ)、口絵「喜廓・わたし・◆(魯文)」、「鈴  
 亭戯吟／五色ごしきをよめる／まだ青あいしると淨じやうるりくろめんと 赤あかき兒こして 黄きなるこえ出す」、板心「調子附」、「骨董や  
 雅楽述」(六オ)。一部分、調子が朱色で入っている。「音曲所／はうたや／糸竹のふしに端唄はうたの音ねをそへて藪鶯やぶうぐいすのこ  
 えも春めく／鈍亭主人題／端唄はうた小本所梅暮里・繪入音曲問屋本町二丁目糸屋連十郎」(十八ウ)。左側に端唄本三冊の広告が載る。  
 パリ東洋語図書館本は前半の九丁のみ、外題「諸通家正律／はうた獨稽古／てうしつき」かへうたいり。

新板やくはらひ (中本一冊 共紙表紙三丁 忍頂寺文庫 <G169/228-48>・都中央 <6641-11>)

○やくはらひ

戀代／魯文記「呂」「文」

へア、ラしぶとひなく／こんばんこよひのかきだしにみゝをそろへてはらひませうくるたひるすのあげくにハイゝわ  
 け小わけの万八もあんまりつらのかわざいふ地蔵のかほも三年ごしまる月みそか十四日あしのかよひや帳めに一年

つもつた一両のはしたハ三百六十日こよひとつまる大晦日はるまでまつてくれの内もふきゝあきたなきことも口のつるぎもはわたゝぬなまくらものゝしたさきうそをつくぼうさつまたにとつたやらぬとぬかすならなべかまちやがまやかんまで此うけとりがかるつかんで二朱の物でもかまひなくふるどうぐやへさらりく」

○役しやづくし

へア、ラ見せたいなく八百八丁の御ひるきに役者尽してはらひませう一夜のまくあき元日の日の出にまふや杏銀づる名に立花のうつまきもあい河原さき三がにち坂東の彦たんなお門をきつとながむれバ千代の竹三や万代の松本こま蔵立ならぶ若てぞろひハ江戸の花する市川のかざりゑび八代目出たき座がしらハ親代くくのゆすりはやしらぎ岩井の若水をくめや衆三の按摩ハいろかをこゝに三ッ大のしらかハ當時とんじの立お山ほかにあら吉中村の福助内へ入豆の花さく所作のはなれわざはやく見たいと関三のよい評ばんを菊次郎ほめる声さへ高」しまやりかく浮世ハ色あくの葉むらやしげる森田さへいりハ大谷友右衛門人の中山文五郎あたりはつさぬ千両の富十郎ハ□る上三都にひく評ばんをあくまげどうのでんぼうがわる口ほざくその所へ此頭取がとんでいくびすじつかんですでんどううしろかへりや中がへり檜ひのぶたいの正めんからをくびやうぐちへ東西く

○角力すまひづくし

へア、ラめでたいなく角力づくしてはらひませう一夜あけたるにぎわひにうれ式守しきもりとよろこびハ人の来村もあら玉のはるに大関小柳のすがたをうつつ鏡岩横ぶなとつて七五三しちごさんかさりみなよりあふて楮王山常やまくゝのめでたさにかないはいとゝ六ッがみねゆたかな御代の君かたけ四本柱の門かざり松とたけとの御用來なみのり舟や宝川恵方ひか

し西のかた上にハ羽をのす鶴かみね下にハあら岩かめの介のぼる出世ハ雲龍のその名ハ四方にひゞきなた四かいがたけもしつかにてかすみたなびくいつくしまとそのきけんハ一りきの氣も荒馬やあら熊のぞうにのはらかぞうがはな黒岩あらぬくもさ山ひろきみくにの和田か原外にハあらし谷嵐天下はれてのこうぎやうハこゝがかんしん大角力なに大男しらま弓あくまけとうをかいつかみ土俵のそとへころりく

○あめりかやくはらひ

へア、ラうるさいなく毎年渡かいの御ちそふに大筒につゞではらひませう鉄ほう玉かあらたまのはる立かへる君がよの一夜あけたる若水をもらひにきたのゑびす國とふる交易にハとりをとつけつこうとねたりごとためしもながき長さきのとふのねむりや唐人のねごとにもしるはつ夢に宝舟やらくろふねの浪のりぞめのじやうき舟いかりをヲロシヤあめりかも海路はるかか恵方からともに入るの沖のかた浦賀みなとをながむればそらに帆をのす異國せんをりてハかためけんちうにわが神こくのいさきよく世ハばんじやくのかゝみもちぐそくひらきやかち栗のかちてかぶとを七五三かざり弓ハふくろへ四かいなみおさまる御代の万せいらくまづ何ごと七くさの唐土のふねのわたらぬさきすとんとんくとうちはやすおりからあくまのけとうじんさまたげなさんとするところをいせの神かせふくハ内おにハそと海みなそこのさかまく浪へさぶりく

※外題「新板やくはらひ／東都 鬼外堂板／作者 鈍亭魯文／景舛齋画」

大一座しりとりとどどいつ（中本一冊、国学院高藤田小林）

京町の猫揚屋町に通ひたりし元禄の五元集ハさまをよく写せし宝晋齋が滑稽なり仮宅の心意気を都々に模ぎせし

ハ安政の放心齋が洒落なり余ハその机下に属していろはの尻取を綴りなせしハ所謂尻馬に乘類ひにして似た山の嘲を  
まぬかれがたししかハあれども美聲の君たちが三筋の糸にかけたらまししかハ拙き文唱もさらに仇めくことのあらんかし  
も

安政三／たつの春

出放臺／多和琴誌◇

遊女菩薩 黛と化して乏民を賑はず圖

画賛曰／傾城の賢なるハこの柳腰色香もふかき花のまゆずみ 戀岱 鈍通子

○都々一ごげん集 放心齋喜廓をらむ／浮世人情／曲輪文唱 連月廿日限り

あかつきのちわいとなりかあのほとゝぎすないてわかれの紙ぎぬた 野狐庵

ふみのかけはしいひよるつてにわたりかけたる恋のみち 喜くわく

なにかしあんにきをもみうらのゑりにさしこむゆきのかほ しら山やすら

毒くはゞさらにゑんりよもないしよをあけてゆきのあしたのふぐとじる 鈍通子

浮世風呂端唄入込 (中本一冊、二十丁、上田市花月〈増※35〉蓬左尾崎〈詞19-88/B46〉香川大神原〈913.58/EL110〉)

浮世風呂の混雑たるや土佐上下に外記袴半太羽織も義太股引も湯へ入る時ハ賢愚を論ぜず豊後可愛や丸はだかおの

がさまく種々ざつた端唄にこつたる大天狗ハ隅の闇間に身をひそめ都々一の浮調子ハ夕部ののろけの自問自答

音曲物真似声色の入湯わづかハ銭八声嗚呼結構な入加減いつも初湯の心地こそすれ 鈍通子戯述 1オ

浮世風呂端唄入混初編

東都 野狐庵鈍通子著

抑銭湯の徳たるや。九夏三伏の暑ときハ。ざつと一風呂に暑気をはらひ玄冬素雪の寒き夜は。首たけしづんで肌





長序二十員そくせきにてうてうこぎつけたるハ例れいの早湯はやゆの癖へまならじ

戊午孟夏

元祖鈍通

1オ

○文雅丹前 根本 信田きつね校

人間常浴 世の中なかのはだむづかしき湯ゆの中にあかの他人たにんを入込いんごにして よみ人しらず

○音曲長者 元祖 仁田澤鈍通選「品」

※外題「浮世風呂」、見返「うき世風呂」、板心「風呂二へん」。

心意氣尻取どゝいつ（中本一冊、房種画、パリ東洋語図書館蔵（JAPAF.125(6)）

序換

汲ひかはず酒に／＼さくらも酔よやせん／＼肩かたにかゝりて／＼戻もるひと枝

行者ゆくわは昼夜ちゆうやをすてぬ兩國ふたごくにの橋上はしの上ゆく水の流ながハたへずしてしかも元もとの水みづにあらぬ角田川かくたがわの舟遊ふねあそびさん吹ふよ川風がわかぜあがれやす  
だれ中の藝者げいしやの一ひとふしハ物本末ものほんまつ「あるしりととり文句ぶんこうとゝ逸えいどいくゝどんぶりと俱ともに浮うたる船中せんちゆう一座いちざゆさんのゆの字じそ  
はじめなるべし

ゆく水の流ながれはたへぬ角田川かくたがわすれちかふたる猪牙じゆがとやね船

隅田川ぐまたがわ棹さしさす月の都鳥みやと娼娥しやうがにまかふ舟の唄うた女

鈍亭

※「歌澤／＼「印」ろ文」

新撰はうた圖會かしらかき心得草(中本一冊、十丁、バリ東洋語図書館蔵〈JAPAF.125(4)〉)

○是よりどゞいつ／はじまりさよふ　ろぶん

へア、あんまりいしつきだるがめやをでゞどうちつとやらかそふはうたハおくびのするほどうたつたてのちとふうをかへすバなるめへおや／＼をそろしい蚊だぞうしろのかやをまへとみせてこふはいだしたところを二ばんめの口上いとみせるつもりだかおぼつかねア

蓼太翁の句意に習ふて

へ五月雨や／ある夜ひそかに／雲間をいでゞ／はれてあふのを／松の月

※丁付は十一〜二十丁。頭書「都々逸作り様心得・當世東都一之大意・酒筵騒唄の心得草・端唄席の心得・藝人座席の心得・ここの出る菓の弘」。下段は各丁二句毎で「花輪蹄里・鈍太郎作……鈍通子・昌平ばし魯國屋」まで十八句を収む。入集している「つまごひやもめ・骨董や雅楽・鈍通子」なども魯文の別号であろう。

柳だるをさなゑとき 第二編(中本一冊、十丁、高橋昌彦氏蔵)

趣向ありと。雖作せされバ其味を知らず。□下にたゝんと萬巻の土用干に。三伏の時炎天に腹をあぶる唐辺僕あれバ。耳学文の知識体。□聞風土の古事來歴で俗を迷す白癡あり。されバ好其中庸を。得て叶へるハ俳風の柳樽に過たるハあらじ。雅中の俗。全中の因神祇釈教戀無常。何でも一句十七文字。寄取見どり花ハ紅ひ。色色なる本來寓言無一物も捻華無上に微笑たつぶりサア／＼お手に開巻御覽と云云

鈍亭魯文戯誌

※見返「家内喜夢田稚繪解 二編」板心「川柳」二、卷末「鈍亭主人輯録」。書中に「鈍通・魯文・雅楽」と見える。

大津繪ぶし（中本一冊、九丁 都中央（6645-29））

大津繪ぶし

李白月下に獨酌して五言絶の端唄を唄へば紫姫石山に參籠して大津繪ぶしをうたふめり夫ハちんふん漢土の醉客是ハ皇國無双の藝者ちよつと坐付の仇文句に雲陰れにし感吟あり爰に予が友岳亭主人常に遊戯三味の四ツ手に駕して普く妓院の穴をうがちそが心意氣を端唄に綴り毎度書房を潤せり実には吾輩の大天窓と称んに難あらじ

戊午冬のなかば

妻戀閑人題「印」

※丁付なし。口絵に「梁左・おねこ・魯文・中丸・さく丸」が描かれる。「芳盛狂画」。「喰積や目だつこまめのあたまがち魯文賛」（二ウ）。二代目岳亭は「出子散人」とも称し所謂〈頭でっかち〉だったらしく、これを揶揄している趣向の画賛である。

都々逸つかれ駒（中本一冊、十丁。パリ東洋語図書館蔵（JAPAF.125(5)）

都々逸宇佳連駒序

式亭三馬が花押ハ。意馬心猿の譬を表し。余が友汗亭六馬の大人ハ同じ心を戯号によべり。夫六馬とハ何の謂ぞ。

意馬六塵の境界に。心の猿の鎖を放知。東方朔が断にあやかり。八千歳も生延んと。金馬門にハあらずして黒門街の市中にかくれ。珍文韓語のかまころしきハ。馬耳東風と聞流し。三弦の手綱撥のむち。トテちんくの轡の音。ひきだす駒の合の手に。おまへと「奈らバ何處までもと。馬士唄ならぬ都々逸の。唱歌を作つて自ら宇なり。自らひいて樂めり。そが形勢や司馬姓が。弾る琴の調にかよひ。けろり閑たる静住座臥。馬は馬連はね者の。おなじ牧なる鈍亭

が。是を梓に上せんと。そばから太鼓をたゝくになん

妻戀坂に隠れなき、貝割の生戯作者

末孟夏

野狐庵魯文述

※「外題芳盛画、六馬撰、盛光画」、見返「どゞいつうかれごま、光齋」、口絵「ころくとかめハころげて日のながき、恩愛のきづなをかけし三味線に娘の所作を引語りせり、岳亭梁左賛、作者六馬、板心」といふ。「都々逸仕立所、汗亭六馬、よしもり門人盛みつゑがく、めてたし、大當り、岳亭校合」。

新ばん撰み都々逸二編（中本二冊）

月雪花をば三すじの糸にのせてながめる仇文句

為永春水

白紙に染る朧な被参候ハ戀のつばみの筆の先

仮名垣魯文

ねぐら定めぬ蝶鳥さへも花のいろ香にやひかされる

松亭金水

庚申秋 應需 東琳書画

※為永春水・仮名垣魯文・松亭金水の撰による都々逸集。「東都一節文句集、雪月光」（中本一冊、阪大小野文庫）は改題後印本。

洋語讀入 倭度々逸 初へん（中本一冊、二十丁。国文研〈未登録〉）

洋語讀入 倭度々逸

友人蘭奢亭香織大人。普く當時の流行を究理し。貴所おはやう直々の。甘口俗語をべけしにして漢語の野暮をぐつと

看破り。儘世さんと笠横文字を。倭言葉に讀入たるハ。唐詩肴の出物に等き。腐糜の所にあらずと雖。世に傳染ハ請合なり

辛未秋

香織が天性ばら垣のあるし、魯文題盡戲記

※外題に「蘭奢亭薫撰、錦龜堂藏板」、見返「洋語讀入やまと度々逸 初篇、香織さく、芳春画、辻龜板」、口絵「外國人稽古之圖」(色摺)、板心「ど、一」、奥目錄「明治三庚午歲春開版目錄、地本繪草紙問屋 御藏前須賀町 錦龜堂 辻岡屋龜吉」。

葉柳ど、いつ (中本一冊 国会(尋44-173))

「種彦の艸菴に門人十柳子集會の圖」

柳亭・種春・仙魚・呂洲・安彦・真似彦・露照・露香・春彦・舛彦・春彦

植こみのやなき光や朝の雨 仮名垣魯文

※「浄書作丸」「岳亭春信校合、種彦門人十柳子作、一光齋芳盛画」「明治十三年四月廿三日御届、編輯兼出版人 本所區緑町四丁目五十一番地 荒川吉五郎版」

#### 四 地口本

地口駝洒落早指南 初編 (中本一冊、国文研(ヤ9-8))

雛形

駝洒落早指南初編叙

だじゅれはやしなん

虎溪に三笑あり。苦樂共に頤を解。腮の鎖はづるゝをおもはず。滑稽に三笑あり。常に口から出放題の。駝洒落を吐て自己喜び笑ふ門にハ福亭に。集會同盟の粹狂連。類ハ俱共洒落のめす。駝洒落の員が三万三千三百三十三句に及べりかゝる笑句の言すてに。なさんも惜と山王の。例の櫻木にのぼせ。苦虫喰の姫いちる。姑婆にお臍でお茶を沸させ。抹香嘗たる閻魔面を。和げ令んと。駝洒落の開山。一惠齋が狂画をそへ。だじやれの問屋松林堂に与へてわらひの種蒔三馬が口調に做僕ハ

「改九戌」文久・壬戌  
 季秋發市

仮名垣魯文戯述 ◆

## 五 近代風俗本

東京粹書 初編 (野崎左文〈憑空逸史〉著・幻花女仙評、中本、活版、明治十四年六月、粹文社) 国会図書館 YDN27538・実践

女子短大 (未見・TKB/531)

東京粹書跋

散花を觴中に浮べ。照月を盃洗に汲み。絲竹の音調あはれにをかしく。面白う唄ひ奏で。しらべの拍子しとやかに。立舞ふさま。靜佛の俤を摸し。今様の酒席交際の宴會には。猛き丈夫の心を和らげ。自己には眼に見えぬ。鬼髭の逆立をも鎮まらするは。悉皆奇楠の薰り座中にほのめく故にしあれば。凡そ社會の親睦には。校書の按排無んばある可からず。只看る花顔の翠袖徐々として新道に往還ひ。柳腰の紅裙靡々として棧橋を徘徊るの嬌姿は。葭町に栖む玉簪の翡翠も。扶桑橋に寄る銀盤の白魚も。及ばさること遠くして。柳橋の緑の肩。東台の花の唇。一まとめに見る心地せらるゝは。新橋南北の狹斜巷にて。府下花柳の粹地中。一に位する所と謂ふべし。夫れ粹」とは單純の謂にして。書に文粹あり禪

機に粹善提あり。粹な由縁と我ながらは。比翼塚の文句に遺り。イヨサの粹書で氣はザンザとは。昔時の小唄に留まれば。夫子の鄭聲は淫なりと曰ひしも。一度淫肆に杏を入れ。その情を味ひ知り。而して後の教戒ならん。誠に夫子は通なり粹なり。色海の濤を渡り。惑溺の淵に臨まざれば。馬んぞ善く綺羅叢裡の薰蕕を辨するに至らん。拙猫々道人の如き、漫に花柳巷を淫肆と視て近く接せず。頻りに藝妓の濫轉を憎みて。常に筆誅を事とするも。絲竹の節操あるを悟り得ざるに。獨り吾友憑空逸史は。年齒未だ而立に遠く。之を藝妓の徒に比すれば。赤襟腕りの若猫ながら。天性の調紋。自然の侑醉。猫爺輩が肩を並べて。烏滸がましく姉さんぶれども。伎藝の巧拙世に所謂。三ッ兒の爲に教へられて。淺瀬を涉る類ひになん。逸史頃ろ三線のかんを偷み。新たに東京粹書を著し。余の古顔の廢れを棄す。坐敷締りの跋を頼む。嗚呼此粹書一度廣告をなすに及ばず。註文のお約束は云ふも更なり。次編の後口間斷なく。箱奴にあらぬ書肆の糶夫が。足に甲馬を附るに至らん。筆硯萬福大吉利市と拙き稿にも燧火を打ちて。逸史の足下に呈すと云爾。

于時明治十四年五月五日の宵の間。新橋竹川町京文社の編輯局にいろは新聞校合の餘暇走筆に記す

猫々道人 假名垣魯文「猫の印」

※刊記「明治十四年五月十七日御届」同六月四日出板、定價金四拾錢、著者 野崎城雄、京橋區西紺屋町拾四番地、出版人 山田孝之助、同區銀座貳丁目壹番地、刊行所 粹文社、同區西紺屋町十四番地、發賣所 風雅鳳鳴、新誌開新社、同區銀座貳丁目拾壹番地、東都大賣捌、新橋竹川町 いろは新聞 京文社、尾張町壹丁目 近事評論 扶桑新誌共 同社（以下略）。広告「東京日日」（明治十四年五月三十日、六月十一日、六月十三日、六月十五日、八月五日）。

開化道戯百人一首（極小本一冊、大阪府立中之島図書館〈N526〉）

夫道戯とハ何の者ぞ各自道に戯れて花にうかれ月に嘯き雅に興するあれバ俗に耽るあり夕顏棚の下涼み男ハてゝら女



ハ二布三十一文字の風流も洒落一口の言葉もそれ／＼道戯のすさみにして雅中の俗調俗中の雅致いづれ歟風流ならざらんや□□此道戯百人一首ハ天明調の古□を□□言葉ハ今様の新しきに依り挿繪ハ二世廣重兄が「尊父譲りの筆輕にさら／＼さつと晝かれし略画に骨あり見所ある百人一首の大一座一盃献じ天皇の初献の禮に始りて掛幕も畏き順徳院の御製ならねど股引や腹掛の俠客も交る雅俗の薤此端書の酌人衆所謂藝妓の名代ハ金春近き

◇新橋の／＼猫々道人◇

※立齋廣重編、文盛堂梓、明治十六年、猫々道人序詞、前島和橋校閱。

稲葉猴雪燈新話 (中本一冊、和装、国文研)

稲葉猴雪燈新話 緒言

世に稲葉小僧 (又因幡とも) と唱せし盜賊武州無宿入墨新助が事跡の概略ハ亡友豊芥子が手本稲葉小僧傳に當時の公判と彼が口供と又諸家より届出し盗み品の員數書とを併せて詳記せし物の外其行事を探るべき引証を知らず該賊その産武州足立郡新井方村の農家の一子にて幼稚き頃より窃盜掬摸の惡手癖あり然も其狡術に妙を得しより田舎小僧と綽名せしを訛りて稲葉と言ひがめし由一説に彼一度稲葉美濃守侯 (或ハ因州藩) の中間たりし由傳ふれど此事曾て本據あらず其頃稲葉小僧ハ泥坊でござる取られる奴ハべらばでござると樽蒲暮節に唄ひそめ該賊が惡名世に高きより其行事を物々しく作案せしハ岳亭定岡が神稻水滸傳を始めとし其の他稗史合巻劇場の脚色にも古人鶴屋南北が新作以來近年もまた翻案して「演劇せり然れ共其實とする所る武家方數百郎に忍び單身梁上の君子と化し盗み得たる財寶ハ悉く酒色の爲に散ぜしのみ其出沒中新吉原町の娼樓若荷屋の遊女深雪野と漆膠の約あり此深雪野後に野晒阿雪と綽名せられ騙賊を業として新助が刑せられし天明の晩年遂に磔刑となりし顛末詳細に著述して劇場に所謂世話

物の体を模擬せり記事の拙なきハお馴染の猫毛の穎とみゆるし有て未ながく御愛讀を希望ふと先前文に御披露かた  
く外題の起原を此に掲げていよく本文の始まり左様

明治十六年十月

假名垣魯文記

※摺付表紙「稻葉猴雪燈新話 全二書房發兌」、見返「稲野年恒画」發行所三友社、内題下署名「東京 假名垣魯  
文 戲述」孤蝶園若菜編輯、刊記「明治十六年十月九日出版御届」同十八年一月十二日再版御届「同十八年二月發  
賣」定價四拾五錢「編輯人 若菜貞爾」出版人 鈴木喜右衛門「大賣捌 鶴聲社」。国会本刊記「明治廿一年四月廿  
九日印刷」同五月四日翻刻出版「隆港堂發兌」。

清元名曲梅の春通解（中本一冊、阪大〈山〉・京大）

千字文の闕書を補綴し校正全きを得るの日其鬢髮雪を頂きて螢窓の許を離れし唐山人の苦心を惟へバ古書に摩滅あ  
り古語に訛傳あり其悞謬を識者の考案遂に校訂の真を供ふれども俚諺俗語下里巴人の曲に至てハ訂して益なきものと  
するより音曲諸流の訛傳悞る儘に語り継古來作者の苦心を滅し其微意を失すること名工往古の妙技を後世の傭工等  
濫りに瑕瑾を修飾ひて反つて原題を害する如し古人一夕の戲述といへども章々句句悉皆出据所あり然れども流行  
古今の變稱漢音呉音の響き現今清朝に至つて一變するに等しく我國語にして雅俗の差異あり地方の称呼あり故に  
謡曲に於る世を経て傳寫の手に悞まられ作者の原意漸々に空しからむ嘆息の餘り前に村田正風が常警津の老松考あ  
り後に高橋廣道が同曲の関乃扉考あり共に遺憾の情に出る歎茲に文友風來山人夙に漢籍の餘力を則り遙に洋書の  
深淵を探り螢雪の餘光稗史小説院本戲冊凡て眼に触る書ハ雅俗を問はず習裡に収て自著を補ひ年來机上に倦ことなく  
頃日燈下の隨筆に世に清元と称へ來る艶曲梅乃春の章句中當流の婦幼輩に作者の妙處を解さしめんと該曲の考証一

本を「綴り直しぬ 抑彼梅乃春の章句たるや風調雅俗に涉り奇句妙文演曲中の巨擘にして當流第一に坐す可きも 往々傳寫の悞句あるを山人が老婆心切博く諸書を引証し古人が佳作を全ふせることに實に風来三世の承景此強記を以て知るべきのみ

明治十六年十一月

猫々道人魯聞誌

※外題「清元梅乃春通解 全」、見返「風来山人著、清元梅乃春通解、大栄堂藏版」、刊記「明治十六年七月十二日御届、同年十二月六日出版、編輯人・河原栄吉、出版人・加藤忠兵衛、發兌人・法木徳兵衛」。本文活版、序文は整版。

割烹店通志(中本一冊、阪大小野文庫(918.5-ONO-187))

酒客りやうりやつしはしかき 必携割烹店通誌序言

強飯酒戰の暴食ハ無禮講の宴に生じ。禮家饗膳の度外にして。必ず太平の器にあらず。凡て飲食を節用せんこと。衣服居住の設けより。第一に心得可しとは。衛屋上の教にして。命ハ食にあり。然れ共その食に依て身の健康を。害するも亦尠なからず。故に膳部の式。調理の撰。古人往々之を辨ず。蓋し献立の式古今異同ありて舊新その製等しからず。彼甲陽軍鑑に。所謂公界も見ぬ奥山家の。分限なる百姓。料理する術も知らず。海老を汁とし。鯛を山椒味噌に索。鴈白鳥を焼物に。鯉を菓子とし。蜜柑をさし。しみとせバ。能肴ども。何れを取りて喰ふ可きやうなく。皆捨る云々と。此説や鯉を菓子といふのみこそさもあれ。其餘ハ今様に。異なるハあらじと思へど。献立式外に出るを以て。しか云たりしにやされバ。隆盛の今世。山海の珍味を競ふて。割烹の製ますく。精く。會席料理と稱する食店。互に鮮魚新菜を鹽梅し。佳肴風味を盡す中に。逸く其業に注意して。調理饗膳賓客をして。喫味の感を發さしめしハ。獨り山谷の八百善にあり。其製料理通一本の著述に擧ぐ是に依て。此を味ふの粹士あれ共。一席可不可を評するのにもて。曾て割烹を論窮するの通誌を「看す。

東柳散人。よく府下盛場に涉り。舌に百味の甘辛を辨じ。口に酒樓の待遇を説く。昔日京師の人。豆腐百珍芋百珍の編述あり。散人の述る所ろ。一品百味に止まらず。數家調煎の精餽。屋樓の廣挾。宴席の風致。待遇の厚薄。載て洩さず評して餘さず。是なん。酒客必携の冒頭空しからずして。且割烹店通誌の名眞に實ありとせん歟。故に贊成の贅語を序とす

明治十八年第三月中院

應需

好食外史

假名垣魯文叟題

※見返「前橋榮五郎編、酒客割烹店通誌、東京 前橋書店梓」、口絵中「廣重」、内題下署名「前橋東柳戲編」、刊記「明治十八年三月九日御届、全年月廿七日出版、定價貳拾錢、編輯兼出版人 前橋榮五郎」。

【附言】

本稿は国文研における魯文プロジェクトの月例研究会や研究大会での発表に基づくものです。多くの知見を与えて下さった参加者のみなさま、取り分け資料について御教示いただいた谷川恵一氏、青田寿美氏に感謝申し上げます。